

## 保育所児における仲間関係の

## 発達に関する研究

横浜恵三子

### はじめに

子ども同志の対人関係は、生後何カ月頃から、いかなる過程を経て発達してくるのでしょうか。また、仲間関係の成立に及ぼす遊具の影響、成人の役割りはどのようなものでしょうか。

筆者は従来、集団保育開始の適切な時期を究明する手段として、乳幼児の不安―分離不安、見知らぬ人への不安等―を中心に研究をすすめてきましたが、そのような成人対子どもとの縦の研究に対して本研究では子ども対子どもとの横の関係すなわち、乳幼児

の仲間関係の発達を中心に研究を進めることにしました。仲間関係の発達時期や発達過程、および発達を促進させる要因について調べることは、集団保育に参加する適切な時期についての資料を提供するだけではなく、乳幼児保育のあり方についても重要な示唆を与えるものと思われまます。

子どものパーソナリティの発達にとって、同年齢の仲間との相互関係が、重要な要因であることは、近年、多くの研究者によって指摘されてはおりますが、厳密な実験にもとづいた研究は少なく、しかも仲間関係が形成される時期に関して、それらの研究結果は必ずしも一致しておりません。一部には、『零歳からの友だ

ち関係』とか『赤ちゃんには赤ちゃんの友だちを』というキャッチフレーズのもとに、零歳代から仲間関係は成立するとみなしている研究者があります。彼らは、零歳からの集団生活は、社会性や自立性を伸ばすだけではなく、D・Qも向上させるので望ましいことだと考えています。他方、S・ビュラー、M・モードリー、M・ネクララの心理学者の従来の説では、乳児期は大人との縦の人間関係が大切で、一歳未満の子ども同志の横の関係は無意味であるとみなされてきました。六カ月から二十五カ月までの九十名の子どもを対象に、詳細な研究を行なった、モードリーとネクラは、保育室の中のサークルの中に同年齢の乳児の2名を一緒に入れて、遊具の有無や種類によって異なる5つの遊び場面における子ども同志の相互関係を観察した結果、六カ月から十三カ月の子どもは、相手を自分の欲している遊具の妨害物とみなしている、十四カ月から十八カ月の子どもは、遊具よりも相手の子どもに興味を示し、協力しはじめる、十九月から二十五カ月の子どもは、遊具を用いて相手と一緒に遊ぶことができるようになる、と報告しています。

彼らの見解を裏づける実験について調べてみますと、前者の場合、最近の研究であるにもかかわらず、実験の対象児数が非常

に少ないために事例研究の域を脱していない点があげられ、後者の場合は、昔の古い実験であるため、条件の統制がとれていない点や対象児も施設児であるために、結果をそのまま普通児に当てはめることはできない点などがそれぞれ不備な点として考えられます。

この種の研究は対象児を多く集めるのが困難であるために、数が少ないのですが、比較的最近のもので、しかも条件が統制されたものとしては、C・O・エッカーマンらの行なった実験があります。彼らは、十月から十二月、十六月から十八カ月、十二月から二十四カ月の子どもをそれぞれ十組ずつ計六十名を対象にして、母親同席の見知らぬ遊び場面で子ども同志の関係を観察しました。仲間との遊びが一人遊びよりも多くみられるようになる年齢は二十四カ月であり、仲間関係は、二十四カ月以前における成人との関係を通して発達してくるものであるという結論が見出されています。本研究は、これらの研究を参考にして、いくつかの子備的研究（早坂一九八〇）を経て、より厳密に条件を統制し、より多くの子どもを対象として行なわれました。

本研究において用いられた、五つの反応は以下のような意味を示しています。「無関心」は、相手に対して関心を示さないこと、「無意図的接触」は、たとえ相手の体や相手の持ち物に触れてい

ても、相手を対等の仲間と意識していないこと、あるいは、偶然に接触することを意味しています。「仲間に対する負の反応」は、相手を意識した上での遊具のとりあいや、「相手に対する攻撃を、相手に対する正の反応」は、相手を自分の仲間とみなして、みづめたり、接触したり、協力したりすることを、「保母に対する正の反応」は、保母に接触する、遊びにさそふ、見つめる、近づき、声をかけることなどを意味しています。観察結果をまとめるためにモードリーとネクラ、エッカーマンらの研究を参考にして以上の五つの反応を設定しました。

## 目的

本研究の目的は以下のとおりです。

(1) 同年齢の二名の子ども同志の間で、仲間関係が形成される時期を見出すこと。

(2) 仲間関係がいかなる過程を経て、質的に深められていくかを見出すこと。

(3) 成人（保母）が、子ども同志の遊びの場に存在することが、仲間関係の発達に及ぼす効果について調べること。成人対子どもとの縦の関係よりも、子ども対子どもの横の関係の方が多

くみられる年齢を見出すこと。

(4) 遊具の存在、種類、数が、仲間関係形成に及ぼす効果を見出すこと。すなわち、遊具のある場面とない場面において、子どもの相互関係の深まり方に差があるかどうかを調べること。また、各年齢によって仲間関係の発達を効果的に促進させる遊具はどのようなものであるかを調べること。

## 方法

### 被験児

阪神間の四つの保育所に入所している、九カ月から三十一カ月までの乳幼児九十名（男児四十六名、女児四十四名）です。被験児は、表1（表ならびに図は文末に掲載）のように、三カ月から四カ月ごとに分類され、七つの年齢群ができました。条件を統制するために、四つの保育所は、保育形態、両親の社会的経済的水準、子どもの発達状態はどの点において大きな差のないものを選択しました。

### 調査期間

一九七九年六月から十一月までが実験期間です。

### 手続

モードリーとネクラ、エッカーマンらの研究を参考にして、実験を計画しました。

月齢差が三カ月以内の二名の子どもを対にして、プレイルームに入れました。保母が実験者として、五場面から構成される実験をしました。第一場面では、遊具を何も与えないで、二名の子どもの間にどのような関係が生じるかを観察しました。第二場面では、小さな立方体を一つずつ子どもに与え、三つ目の立方体は、二名の子どもの間に置きました。第三場面では、鈴一つを、リンリン、ふりながら二名の子どもの間に置きました。第四場面では、棒を一本ずつ子どもに渡し、たいこを一つ、二名の子どもの間に置きました。第五場面では、ボールを一つ、二名の子どもの間で、二、三回ころばせて、遊び方を提示してから、二人の間に置きました。

以上のように、五つの場面によって、遊具の有無、遊具の数と種類に差をつけて、それぞれの子どもの反応を記録しました。三名の観察者は、実験後、二十六項目からなる五つの反応についてのチェックリストに別々に記入しました。観察者間で、チェックの一致率は、八十五%以上がえられました。

#### 手続

(1) 観察した「無関心」「無意図的接触」「仲間に対する負の反応」

「仲間に対する正の反応」「保母に対する正の反応」の五つの反応が、年齢別に分類した七つの年齢群間で、有意に異なるかどうかを検定しました。

(2) 五つの反応のうち「無意図的接触」「仲間に対する負の反応」「仲間に対する正の反応」の三つの反応に関して、各年齢グループにおけるそれぞれの割合を算出しました。

(3) 各年齢グループにおける、正の反応に関して、仲間に対するものと、成人に対するものとの比率を比べました。

(4) 各年齢別に、五つの反応について五場面間に有意差があるかどうかを検定しました。

(5) 「仲間に対する正の反応」に関して、各場面別に年齢差があるかどうかを検定しました。

#### 結果と考察

##### (1) 仲間関係成立の過程と時期

観察した五つの反応に関する七つの年齢群の得点は図1～5までに、七つの年齢群間の有意差は表2に示したとおりです。

五つの反応のうち、「無関心」「無意図的接触」「仲間に対する

正の反応」はそれぞれ、七つの年齢群間で一%水準で有意差のあることが明らかになりました。年齢の低い子どもほど、「無関心」と、「無意図的接触」の反応が著しいのですが、それらは年齢が高くなると、しだいに減少して、逆に年齢の低い子どもにおいてはあまりみられなかった。「仲間に対する正の反応」が著しくみられるようになりました。年齢の低い子どもたちほど、相手に対して無関心で、たとえ互いに接触していても相手の存在を意識しないことが多いことや、年齢が進むとしだいに相手に対する関心が高まってゆき、相互交渉や協力あそびが活発に発展することが、本研究結果から示唆されました。七つの年齢群の中で、二群間の有意差を検定してみますと、「無関心」は九〜十一カ月児と十二〜十四カ月児の間で一%水準の有意差がみられ、「無意図的接触」は二十一〜二十三カ月児と二十四〜二十七カ月児の間で五%水準の有意差がみられ、「仲間に対する正の反応」は十五〜十七カ月児と十八〜二十カ月児の間で五%水準の有意差がみられました。これらの結果をさらに裏づけるものが、図6です。ここでは、各年齢群における「無意図的接触」「負の反応」「正の反応」の割合を算出して図示しました。年齢の低いA群（九カ月〜十一カ月児）においては、仲間との交渉の八十八%が、「無意図的接触」で、六%が「仲間に対する正の反応」でしたが、年齢が高く

なるとしだいに逆転して、最も年齢の高いG群（二十八カ月〜三十一カ月児）においては、「無意図的接触」が二十二・四%、「仲間に対する正の反応」が七十三%になりました。この二つの反応が逆転する年齢は、D群（十八カ月〜二十カ月児）とE群（二十一カ月〜二十三カ月児）の間でした。これらの結果から次のようなことが明らかになりました。十二カ月未満においては相手の持っている遊具や、相手の体や衣服に対してさえも無関心であった子どもは、十二カ月を過ぎると、まだ相手に対する関心はないけれども、しだいに、相手の持ち物や体に興味を示し始めるようになります。このような「無意図的接触」は二十四カ月を過ぎると減少し、それに代わって、十八カ月頃から顕著にみられるようになった「仲間に対する正の反応」がますます盛んになって、積極的な相互関係が展開されるようになります。十八カ月から二十四カ月頃は、子どもの興味は、相手以外のもの、すなわち、相手の遊具、衣服、体などから、相手そのものに移行する時期であるといえるでしょう。そして、子ども同士の間で互いに相手を自分と対等の仲間とみなす対人関係が成立するのは、二十四カ月以降であるかと思われま

## (2) 仲間に対する負の反応について

表2において、七つの年齢群間で有意差を示さなかった反応の一つに「仲間に対する負の反応」があります。遊具をめぐって子どもたちの間でけんかや攻撃の起ることが予想されていたのですが、図6においても他の反応に比べるとそれほど多く見られていません。すなわち、けんかや攻撃の場面が、今回の実験ではそれほど多く見られなかったし、また、年齢による差もほとんどみられなかったといえます。このことの原因としては、二名の子どもたちが、互によく知り合っていたこと、保母が同席したために子どもたちが安定していたこと、各場面の観察時間が二分間という短いものであったこと、などが考えられると思います。

### (3) 仲間関係成立に及ぼす成人の役割

本研究では、子どもたちにできるだけ応答をしないという条件で、保母が実験場面に同席したのですが、大部分の子どもたちが、しばしば保母の姿を探し、目と目を合わせて安心してはいるけれども、自分たちの働きかけ言葉かけや、体の接触などに対していつものように応じてくれない保母の態度にとまどっていた様子が印象的でした。これは年齢の高い子どもたちにおいても、しばしばみられました。表2によると、「保母に対する正の反応」は、七つの年齢群において有意差がみられなかったのですが、こ

のことは前記の観察を裏付ける事実です。すなわち、集団保育の場において、いかに仲間関係が発達したとしても、その仲間関係は、子ども対成人（保母）の縦の関係が親密でしっかりしたものであることを土台として形成されるものであるといえましょう。したがって、一人の保母に対する子どもの数が多くなることは、仲間関係形成の上にも望ましいことではありません。

このように「保母に対する正の反応」は各年齢群間に有意差の生じない反応ではありますが、年齢が高くなるにしたがって徐々に減少していることは確かです。正の反応のうちで、仲間に対する反応と、保母に対する反応の割合を示している図7では、年齢が高くなるほど、保母に対する正の反応が低くなり、仲間に対する反応が高くなるということが認められます。二本の線が交わる年齢、すなわち、子どもの関心が、保母よりも仲間の方に多く向けられたのは、F群（二十四カ月～二十七月児）以降の子どもたちでした。

以上の結果は、仲間関係形成に及ぼす成人（保母）の役割りの重要性を示唆しています。特に、本研究の被験児に関しては、保母の存在なしに、二十四カ月以前に仲間関係は形成されえないといえるでしょう。

#### (4) 仲間関係成立に及ぼす遊具の役割

遊具のない第一場面、積木三個の第二場面、鈴一個の第三場面、たいこと棒二本の第四場面、ボール一個の第五場面、これら異なる五つの場面によって、相手に対する反応に差が生じるかどうかを検定しました。その結果、「無関心」と「保母に対する正の反応」に関しては、いずれの年齢群においても五つの場面間に有意差のないことが見出されました。「無関心」については、場面による差よりも年齢による差によって違いを示すものと考えられるので、遊具によって、子ども同志の無関心の度合を減少させようとするは無理であるといえるでしょう。「保母に対する正の反応」に関する結果からも遊具の存在によって、子どもから保母への働きかけが減少するものではなく、成人（保母）対子ども、子ども対成人（保母）の関係が、いかなる場面においても安定感を生み出す重要な要因であることが明らかにになりました。

「無意図的接触」はA群（九カ月から十一カ月児）において五つの場面間に有意差がみられました（ $H=12.79$   $P<.05$ ）。「無意図的」ではありますが、子ども同志の接触が最も多くみられたのは、鈴（第三場面）と、立方体（第二場面）でした。特にこの二つの場面は、遊具のない第一場面と、ボールの第五場面との間

で有意差を示しました。二名の十二カ月未満児の間では、ボールはそれほど適した遊具ではなく、むしろ、小さな手にもてるくらいの立方体や鈴の方が有効であるといえるでしょう。

「仲間に対する正の反応」はF群（二十四カ月～二十七月児）とG群（二十八カ月～三十一カ月児）において五つの場面間に有意差がみられました（F群は  $H=11.46$   $P<.01$ 。G群は  $H=9.71$   $P<.05$ ）。F群、G群はいずれも、ボールの遊び場面において、仲間同志の交渉が最も活発にみられました。この二つの年齢群において、ボールの場面は、鈴の場面や、遊具のない場面との間において、有意差を示しました。

E群（二十一カ月～二十三カ月児）においては五つの場面間に差のある傾向（ $H=10.12$   $P<.01$ ）がみられました。この年齢で、最も相互交渉が活発にみられたのは、たいこの場面でした。二十一月～二十三カ月児では、それぞれの子どもが棒を一つずつ持って、相手の動きを模倣しながら互いにはほえみあって、たいこをたたく情景が多かったのですが、二十四カ月以上の子どもでは、ボールを投げ合ったり、ころがったボールを拾いあったりして、身体を大きく動かしながら、協力して楽しく遊ぶ情景が多かったといえます。これらのことは、子どもの身体的、社会的発達に適した遊具を与えることが、仲間関係形成の上にも重要で

あることを示唆しています。

「仲間に対する正の反応」に関して、さらに、各場面別に年齢差があるかどうかを検定しましたが、遊具のない第一場面においては七つの年齢群間に有意差は生じませんでした。その他の遊具のある四つの場面においては、いずれも有意差がみられました。これは、遊具のある場面では年齢の低い子どもに比べて、より活発に遊びを展開させることのできる年齢の高い子どもたちが、遊具のない場面では、彼らの相互交渉において、年齢の低い子どもたちと差のなかったことを示しています。仲間関係の発達において、遊具が遊びを誘発する大きな刺激となつているといえるでしょう。

## 要約

九か月から三十一か月までの乳幼児九十名を対象に、五つの遊び場面において、同年齢の二名の子ども間にみられる相互交渉を観察しました。

仲間関係は、十二か月未満では「無関心」、十二か月すぎから二十四か月頃までは、「無意図的接触」の多いことが見出されました。「仲間に対する正の反応」は十八か月すぎからしだいに多

くみられるようになり、活発になるのは二十四か月以降でした。

子どもの関心が保母よりも仲間に対して多くむけられたのも二十四か月以降でした。

「保母に対する正の反応」は年齢が高くなるほど徐々に減少していたけれども、それは年齢の低い子どもとの間で有意差を示すものではありませんでした。三十一か月までの子どもにとって、仲間関係発達の土台には、成人との安定した関係が必要であると見えましよう。

仲間関係の発達には、年齢に適した遊具が重要な役割りを果たすことが見出されました。本研究の場合、九か月～十一か月では、鈴や立方体、二十一月～二十三か月ではたいこ、二十四か月以上ではボールが、それぞれ、その年齢の子どもにとって、遊びを誘発し、仲間関係を活発に発達させる刺激となつていることが見出されました。

共同研究者の岡野和子さん、金谷玲子さん（聖和女子大学）寺前彦江さん（坂田保育所）実験資料を集めるのに労をいとわず御協力下さいました。神愛館ベビーセンター、甲子園つくしの友保育所、坂田保育所、聖和乳幼児センターの先生方と子どもたち、心から感謝いたします。

（聖和女子大学）



表 1 被 験 児

		A	B	C	D	E	F	G
月	R	9—11	12—14	15—17	18—20	21—23	24—27	28—31
齢	$\bar{X}$	10.2	13.6	16.1	19.7	22.9	25.5	29.4
	(S D)	(1.332)	(.587)	(.818)	(.965)	(.939)	(.728)	(.779)
人 数	男	5	4	5	10	9	7	6
	女	5	6	7	6	4	11	5
	計	10	10	12	16	13	18	11

表 2 5つの反応の年齢別有意差 (H)

反 応 の 種 類	H	P
無関心	32.06	.001
仲間への無意図的接触	17.81	.01
仲間に対する負の反応	9.76	N.S.
仲間に対する正の反応	46.31	.001
保母に対する正の反応	6.13	N.S.

図 1 無関心

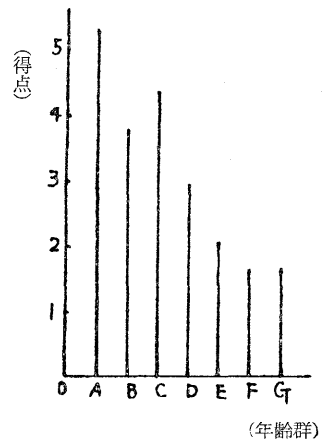


図 2 無意図的接触

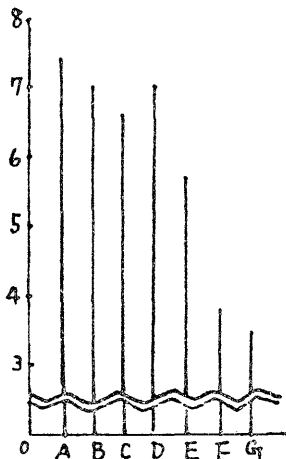


図 3 仲間に対する負の反応



図4 仲間に対する正の反応

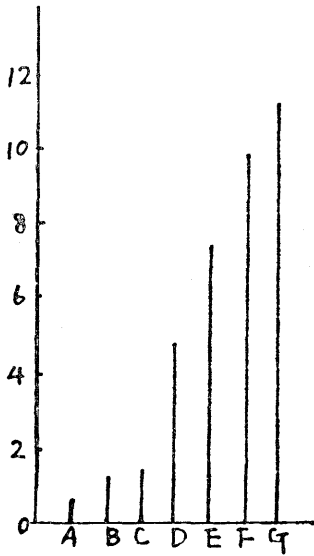


図5 保母に対する正の反応

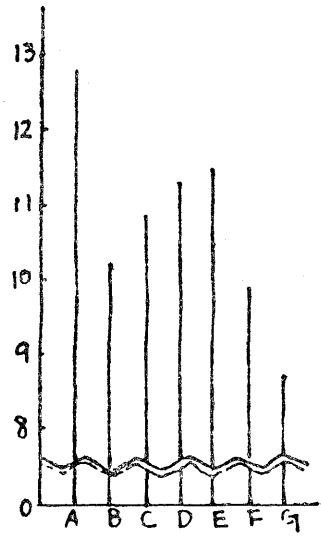


図6 仲間に対する反応の質的变化

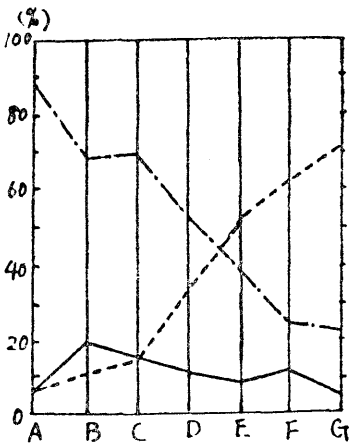
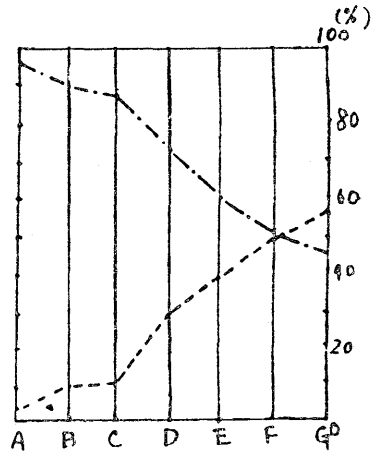


図7 保母及び仲間に対する正の反応



- - - - - 無意図的接触  
 ————— 負の反応  
 ..... 正の反応

..... 仲間に対する正の反応  
 - - - - - 保母に対する正の反応